鏡の中の自分

犬山・寂光院山主
松平實胤（まつだいらじついん）



古希を迎えて

また今年も誕生の朝を元気で迎えさせていただいた。有り難いとしか言いようがない。六十五になった頃からだったろうか、誕生の朝を迎えると、歯を磨き、顔を洗ってそのあと、しばらく「鏡の中の自分」に見とれるようになった。そして鏡の中の自分と対話するようになった。

「この顔にさせて戴くために六十五年の歳月が必要だったんだな、この顔にさせて戴くためにどれほどの人に出会ったのだろうか、どれほどの人にお世話になって今日をむかえたのだろうか」、さらにもう一つ、「この顔にさせて戴くために、どれほどの人に迷惑をかけてきたのだろうか。どれほどの人が私の迷惑を我慢して赦してきて下さったのか」対話を重ねるうちに、いかに傲慢で自惚れの強い私の顔でも少し穏やかになって「おかげさま」と手を合わせ、「自分がして戴いたように人様にして差し上げることはないか」と考えるようになった。

そして古希を迎えて以来、この頃では毎朝のように鏡の中の自分に、「是が自分の顔を確認する最後になるかもしれない」と言い聞かせるようになった。

何の為に生きる？

私は未だその問いに対する明快な解答を持ちえないが、最近では「最後の顔になるため」と答えることにしている。この世に生を受けて老若不問、寿命の長短を問わず、その人の最後の顔が人生のゴールであることには間違いない。また、その最後の顔は例外なく仏として拝まれる。となると「何の為に生きる」という問いに対して「仏に成るため」というのも解答の一つである。

お釈迦様は三十五歳でお悟りを開かれて仏陀（仏）と成られたが、また周りから修行完成者と呼ばれるようになる。「仏とは修行完成者」ということであれば、仏になるまでの道のりはすべて修行、まさに「人生は修行」といっていい。

仏教の大前提は「人生は苦なり」、思う通りにならないのが人生、まさに四苦八苦である。となれば、思う通りにならない人生を、「あなたは、どれほど辛抱が出来ましたか、どれほど我慢が出来ましたか、どれほど人に譲ることが出来ましたか、どれほど人を赦すことが出来ましたか」と問われるのが人生でもある。

また修行の完成形が仏であるならば、人生はどこまでも未完成どこまでも不完全だが、完成（仏）に限りなく近づくいとなみ、これが人生といっていい。

出来得ることなら、「こんな時仏さまならどんなお気持になられるだろうか、こんな時仏さまならどんな言葉を口にされるだろうか、こんな時仏さまならどんな行為行動をとられるだろうか」と少しでも仏さまの真似をしてみるのも生き方のコツかもしれないのである。

いつ最後の顔、仏に成ってもいいように、少しでも仏の真似をして、心豊かに生きたいと思うこの頃である。